未来ブックレット①

省みて前へ

—プログラム協議の発展のために—

室井　健二

刊行のことば

一九八九年中国・天安門事件、九一年ソ連邦崩壊に象徴される二十世紀社会主義挫折の影響は大きく、わが国思想界は志気阻喪と混迷のなかで未だ冬の時代を脱しきれない状況下にあります。

他方で、グローバリゼーション下の現代資本主義は弱肉強食の本性をいっそう露骨にし、世界的な富の偏在と被抑圧民衆の窮乏化に拍車をかけています。それば かりでなく現代資本主義は地球環境を喰い遺し、人類の生存そのものをいまや危機的状況に陥しいれています。

二〇〇一年の「九・一一事件」以降、アメリカは「二十一世紀型の最初の戦争」をアフガンに発動して以来、世界史は大激動期に踏みこみました。二十一世紀は文明と人類の存亡をかけた危機と動乱の時代になるでしょう。この危機を打開する途は、世界的なプロレタリア民衆の現代資本主義打倒をめざす新たな革命以外にはありません。

こんにち、わが国ではプロレタリア民衆解放のための新たな思想と理論が強く要請されています。困苦と窮乏の淵に辛吟する労働者民衆に自らの解放と光明の前途はあるのか。

われわれは協同と協働の思想のもとに、マルクス的共産主義の立場からその方途を明らかにすべく本誌を刊行します。

二十世紀共産主義運動の総括と現代資本主義の分析に基づいて、われわれはプロレタリアート解放の理論としてのマルクス主義の新生と新たなプロレタリア革命の方向・その党的主体を探求し明らかにしていきたいと念願しています。

われわれは独善とセクト主義を排し、マルクス主義者の協同と連帯、知識人と勤労者の連帯と協力を切に願います。

二〇〇二年五月

◆ 共産主義協議会・未来（コム・未来）
未来ブックレット編集委員会

未来ブックレット

省みて前へ

―プログラム協議の発展のために―

目次

はじめに

一、日本共産党の経験 ―六一年綱領路線とその「民主集中制」― ……1
(1) 宮本綱領路線への疑問 ……1
(2) 民主集中制の実態 ……5
(3) 細胞の分化と査問・除名 ……5

二、日共除名から日共(左派)結成参加まで(一九六八年春―六九年十一月) ……9
(1) 東京準備会への参加 ……10
(2) 内ゲバとテロル ……15
(3) 中ソ論争と中国・プロレタリア文化大革命 ―当時の私の認識と態度― ……18
(4) 中国派の統一と建党問題、全国協議会 ……21

三、日共(左派)の結成と分裂(一九六九年―七五年) ……24
(1) 日共(左派)結成の意義 ……24
(2) 極「左」路線と労働者運動及び統一戦線 ……25
(3) 党建設の問題 ……28
① 「整風運動」による党への打撃 ……30
② 頭でっかちの党建設 ……31
③ 革命者はいかにして育成されるか ……31
④ マルクス主義の思想方法と理論を身につける ……32
(4) 極「左」路線との対立と党の分裂 ……33

四、日共(左派)関東ビューローと統一の推進 ……38

五、二〇世紀社会主義の挫折と総括 ……42

六、いま思うこと ……47

はじめに

共産主義協議会（コム・未来）がマルクス的共産主義の政治組織として出発する際には、ロシア革命の挫折に象徴される二十世紀国際共産主義運動の総括を踏まえることがどうしても必要だ。わが国の共産主義運動もそれと無関係ではありえなかったし、とりわけ二十世紀共産主義運動に大きな害毒を及ぼしたスターリン主義の影響を強く受けてきたからである。国際的な総括となれば問題も大きく、不十分さは避けられないが、しかしそのような姿勢は必要ではなかろうか。

このような視点から、この際、われわれ自身、自らのこれまでの活動をふり返り、それぞれの経験と教訓をもちより、それらを共通の財産として再出発すべきではないかと思う。

そこで私も自らの政治的半生をふり返ってみることにした。顧みれば、日本共産党入党いらい約40年間それなりに動きまわってきたが、なにをなしてきたのか、どれほどのことをなしたのかと自問すれば、自責の念のみが強い。そしてまたいかほどのマルクス的共産主義者であったのかと問われれば、これまた恥しい次第である。あまりにも誤りと失敗の経験が多い。人様に披瀝することもはばかれるが、若い人達の参考にしてもらえればそれで良い。

私は、一九六〇年代の初めに日本共産党に入党し、六八年に同党を除名され、その後日本共産党（左派）の結成（六九年十一月）に参加し、七五年同党を除名された。日共（左派）の分裂に際しては、日共（左派）関東ビューローに所属し、その後、日共（左派）関東ビューローと日共（マルクス・レーニン主義）との統合、さらに日本労働者党との統合に参加した。

私の政治的略歴は右の通りである。私は日共除名後は、俗に言われた「中国派」の政治的潮流に属してきた者と言えよう。しかし、「中国派」も一様ではなかったし、この間の政治的諸問題や諸々の経験についての評価や総括はあくまでも私個人のものである。

室井健二

一、日本共産党の経験 ―六一年綱領路線とその「民主集中制」―

(1) 宮本綱領路線への疑問

日共時代は末端の細胞活動の経験しかない。当時の細胞生活と活動はかなり規律正しく、週一回の定例会議で活動の方針や政策を決めて実践し、点検や学習もした。会議をさぼる者もほとんどいなかった。いまの日共はかなりルーズな組織に変わったと思うが、当時はまだそうではなかった。この経験は私にはプラスになった。

しかし、実際の活動と自らのマルクス主義の学習が少しづつ進むにつれて、日共の六一年綱領路線への疑問と批判が次第に強まっていった。私ばかりでなく細胞の多くの同志たちがそのような批判的傾向を強めていった。

日共の現綱領の基礎ともなっている一九六一年（第八回党大会）綱領は、様々な問題点と日和見主義的内容を持っていた。ここではその詳細に立入ることはできないが、例えば、戦後世界資本主義の相互関係の中での日米関係の変化、日本独占資本の帝国主義的復活を主要な特徴として

とらえず、依然として五一年綱領的な「従属国」規定的に基づく「反米愛国」的傾向を引きずっていた。

形而上学的な「二つの敵」論は、当面する日本革命の主要な打倒対象は誰なのか、誰が日本の国家権力を握っているのかを不明にし、革命の根本問題であり政治革命と国家権力との関係の問題を不明にし、また日本革命がプロレタリア社会主義革命の性質をもつことを明示しなかった。それは折衷主義を特徴とし、日本革命の打倒対象と原動力、その任務と性質、前途と転化を明確にしなかった。

しかし、なんと言っても宮本綱領の背骨をなした最大の問題点は、ブルジョア議会を通じての社会主義への合法的・平和的移行という議会主義・社会改良主義を革命の基本路線としていたことであった。それはプロレタリア革命における強力革命の原則的立場の放棄と裏腹であった。国家権力問題からの回避はその伏線であった。

このような議会主義・構造改革路線は一九五〇年代にイタリア共産党のトリアッティらによって提唱されソ連共産党のフルシチョフらに支持されていたが、日本共産党の宮本指導部はこのような政治路線へと大きく右転回していた。

戦前の問題はさておき、戦後日共は野坂の「平和革命」論から五一年綱領、そして六全協から第七回党大会を経て第八回大会の六一年綱領へと、右から「左」、また右へと政治路線上の大きな誤りを繰り返してきた。その原因はどこにあるのか。そしてまた、宮本・野坂・不破らがどのよ

うにして党の指導権を握るに到ったのか。これらはマルクス主義的観点から総括される必要があると思う。

宮本指導部の議会主義路線下で日共の活動の重点は、ブルジョア議会でいかに議席を増やすかという選挙中心の活動へと転換していった。労働者運動を中心とする大衆闘争と革命的統一戦線の発展を促すことよりも議会と選挙が重点となった。

われわれは、議会と選挙はブルジョア先進国の政治闘争で重要な意義をもっており、これを軽視したり否定したりすることは誤っていると考えていたが、しかし、ブルジョア議会で共産党が多数を占めうるとか、議会を通じての社会主義への合法的・平和的移行が可能であるなどとみなすのは幻想に過ぎず、ベルンシュタインやカウツキー以来の日和見主義の焼き直しであり社会民主主義思潮と変わるところがないという認識を強めた。

宮本指導部は強力革命の立場を放棄していたが、それに煙幕を張るために有名な「敵の出方」論なる「四・二九」論文を発表し、社会主義への合法的移行を宣伝するために、インドネシア共産党やチリのアジェンデ政権を讃美していた。しかし、インドネシアの九・三〇事件で数十万の共産党員が殺され、アジェンデ政権が転覆されるや、その路線や原因については口を閉じた。

六〇年代半ばから後半の内外情勢について言えば、国際的には、米帝のベトナム侵略反対の高まり、中ソ対立の激化、国内的には、ベトナム反戦と学生運動の高揚、三里塚闘争、七〇年安保改定に反対する闘争の全国的な高まりの時期であった。このような時期に、四・一七スト反対に

象徴されるように日共指導部の右転回は実践上でもいっそう顕著になった。

六〇年代半ばからの中ソ論争と中ソ対立の激化は、われわれに大きな政治的影響を及ぼした。学生時代から中国革命への憧憬にも似た期待感を持っていた私は、ソ連共産党への批判、中国共産党支持の姿勢を強めた。

日本人民の闘争への中共の断固たる支持、ベトナム人民の闘争に対する中ソ両国の支持の相違、ソ連のチェコ侵略や中ソ国境紛争、ソ連の「平和共存」政策への疑問は、私のこのような姿勢をいっそう強めさせた。

一九六六年から始まった中国・プロレタリア文化大革命に対しては、官僚支配体制の打破、パリ・コミューン的なプロレタリア民主主義の実現をめざすものとの期待感を強く抱いた。

中ソ論争の他に、中国共産党が発表した『フルシチョフのエセ共産主義と今日的教訓』は、日共の構造改革路線への批判を強めていたわれわれにとっては大いに共鳴するものがあった。私は、今でもこの論文は基本的に正しいと思っている。

毛沢東・宮本会談の決裂をわれわれはその内容は知らされなかったが、内心歓迎した。まもなく日中友好協会が分裂し、日共系との間に善隣学生会館をめぐって暴力沙汰が起こった。上級から動員要請が来たが、何の説明もない動員には細胞は応じなかった。

(2)　民主集中制の実態

党の路線・政策への疑問が深まる中で、細胞の責任者になった私は、上級機関へ指導を求めた。

細胞会議では、構造改革路線問題をはじめあらゆる問題についての質問や疑問が続出した。地区委員会は満足に応答できなかった。次々に人が替わったがみな同じだった。労働者出身だろうが、マルクス主義についてはおそろしく無知にみえた。地区委員会が応答できないならもっと上級に来てくれるよう要請したが、なしのつぶてであった。

私は地区会議に出席しては質問のために挙手したが、けっして指名はされなかった。地区委員会の別室で地区委員たちが中国問題についてあれこれ話しているのが聞こえたが、われわれの細胞には何らの報告もなかった。私は上級機関との関係を悪化させたくはなかったが、しかし、それは止むなく悪化していかざるをえなかった。

(3)　細胞の分化と査問・除名

最終的に上級機関がとった手段は、党内矛盾の民主的解決ではなく、その反対であった。批判的党員への査問が始まった。批判的党員は個別に地区委員会へ呼び出され、数時間査問された。

私への査問は激しい論争となった。私の党活動に批判の材料を見出すことはできなかった。われわれは分派活動は行っておらず、党の路線・政策への疑問や批判を正面から提出していただけであった。路線・政策問題では上級機関は明確な解答をすることができなかった。地区委員会が解答も指導も出来ないのなら、われわれの質問状を上級に上げるか、不破哲三でも呼んで指導してもらいたいと要請した。地区委員会は上級機関の指示のみを遂行する茶坊主集団に過ぎなかった。査問とは、要するに、われわれを除名するかどうかの首実験にすぎなかった。

他方で、上級機関は批判的党員を排除して少数の盲従的党員のみを集めた細胞会議を秘密裡に招集していた。中間的党員を通じてそれは発覚した。われわれはその会議に参加した。招集した上級機関は釈明も出来なかった。かれらこそ勝手に分派会議を招集していたからである。党規約を破っているのは誰なのかということになった。

党内闘争の過程で解ったのは、党員内にも先進、中間、遅れの部分があることである。これは避けられないが、嫌だったのは、口先では批判的言辞を奔しながらどたん場になると自己保身から身をひるがえす「共産主義者」をみたことである。私の先輩にはこの類の人々がいた。この類の人々はその後はマルクス主義からも離れ、マルクス攻撃に移っている者もいる。

査問の後、批判的党員宛に書留郵便が送付された。「除名通知」である。理由は分派活動である。まったく理不尽な除名通告であった。資本家の首切りより悪質だと思った。首を切られてもどこにも訴えようがないのである。革命党ともあろうものが、革命を志向する党員をこうも簡単に

一方的に処分し、その政治生命を勝手に断つことが許されるのであろうか。

私は、共産主義者の組織は上級・下級の別なく対等平等で、意見の相違は討論することができ、あらゆる問題は民主的に解決することができるし、またそうすべきだと考えていた。「民主集中制」とはそのようなものだと考えていた。他の同志たちも同様の認識であった。しかし、それはわれわれの勝手な解釈であった。

当時私は、「民主主義的中央集権主義」（いわゆる民主集中制）はプロレタリア政党の組織路線としては正しいものと考えていた。宮本指導部は民主集中制を正しく遂行していないとみなしていた。レーニンの組織路線の批判的検討の必要とスターリン主義組織路線の批判、とりわけ民主主義的中央集権主義なる組織路線の批判にとりかかったのは、後年になってからである。まことに愚鈍と言われても仕方がない。

思うに、民主集中制の名の下に、どれだけ多くの革命者が日本共産党から除名排除されたのであろうか。おそらく相当の数にのぼるだろう。自らの足を切って革命など成るはずもないのである。われわれは労働者民主主義に基づく組織路線に立脚すべきと思う。そこにこそ真に民主も集中もあるのである。

私の日共体験は右のようなものだった。それは末端の細胞の小さな経験だったが、私にとっては貴重な体験だった。

その後、日共の社会改良主義路線は全面的に開花し、その右転回は安保・自衛隊・天皇制容認

にまでいきついた。いまではブルジョア政権参加のためにブルジョア政党に寄りついている。イタリア共産党に代表される旧スターリン主義党が構造改革路線を掲げてこんにちいかなる顛末を迎えているか。日共はその後を追いかけている。マルクス主義の原則的立場を放棄した党がいかなる途をたどるか。これはわれわれにとって重要な教訓とみなすべきだろう。

日共を除名された当時の情況と自分の思想・感情は今でも鮮明である。衝撃が大きかったからである。

突然の除名でわれわれは裸で野に放たれた状況であった。やり場のない憤りと同時に、マルクス主義者としてこれからどのように生き、どのように活動していくのかという問題に直面した。あらかじめ予期し考えておかなければならない問題であったかも知れないが、そのようなことは考えてもいなかった。予期しない事態に直面して途方に暮れたというのが実際であった。

革命的組織なしに革命運動は考えられない。しかし、一細胞ではどうにもならない。ともかく除名された党員の細胞は維持し、今後の方向を探ろうということになった。

二、日共除名から日共（左派）結成参加まで

（一九六八年春―一九六九年十一月）

日共を除名された六八年春から翌六九年十一月の日共（左派）結成までの約一年半は、短期間ながら私の政治的半生の中ではきわめて凝縮した期間であった。この短期間に私は、新たな様々の問題に直面した。

細胞の日本共産党東京都委員会（左派）準備会への参加、準備会を通じての日共（左派）全国協議会への参加、東京準備会の専従への転身、日中友好協会（正統）本部内の内ゲバとテロルの体験、労働者運動での大きな失敗など諸々体験することになった。いくつかのことを記す。

(1) 東京準備会への参加

日共除名によってこの党には見切りをつけた。宮本、野坂、不破らの指導権とその路線下でこの党が、革命的方向へ向かうなどと期待することはもはやできないと思った。

ではこれからどうするのか。各同志と細胞にとってそれこそが最大の問題だった。マルクス主義のプロレタリア政党が必要だ。そのような党派があればと思ったが、周りをみてもありそうにはみえなかった。

新左翼の党派については、小ブル急進主義でプロレタリア的組織とは思えなかったので、対象とはならなかった。宮本指導部と分裂した春日庄次郎氏や志賀義雄氏らの組織には、構造改革論とソ連派の印象が強かったので関心を持てなかった。

トロツキーの思想と活動については当時私は何も知らず著作も読んでいなかった。新左翼の小ブル急進主義を通してトロツキズムを同類のものとみなしていた。この点は私の半生で自身もっとも悔いたことである。

模索する中で二つの情報を得た。

一つは、高校時代からの友人でモスクワに留学していた新谷からの情報だった。彼はモスクワを追放されて帰国していた。彼とは留学中も連絡をとり、中ソ論争では共に中国支持だった。ソ連帰りの新谷、佐久間、足立らの友人は帰国後『ソ連は社会主義国か』を出版し、それは中国で

も翻訳出版された—今からみれば、それはスターリン主義的立場からのソ連批判であったが、われわれの当時の思想的・政治的立場と水準を表していたと思う—。

新谷からの連絡で、日共山口県委員会が大きく二つに分裂し、一方の山口県委員会（左派）は宮本の構造改革路線に反対で「中国派」であり、彼も接触中とのことだった。私はその左派は革命派として信用できそうかどうか問い合わせた。

ともかく一度来てはどうかとの返事で、私はすぐに出掛けた。岩国基地反対の集会とデモに友人と一緒に参加した。そこで原田長司氏が演説するのを聞いた。それは私に強い印象を与えたことを憶えている。このような革命的風格を思わせる人材のいる組織ならば信頼できるのではないかと思った。その原長さんはその後まもなく山口（左派）を追われ、私が直接会えたのは後で述べるように七年後のことであった。

もう一つは、東京でも日共反対派の「中国派」が結集の動きを始めているとの情報であった。私は中国プロ文革の文献を集めに善隣会館内の書店を訪ね、書店主にあれこれ質問したのだが、彼は日中友好協会（正統）本部の西田理さんを訪ねたらと紹介してくれた。

西田さんとはその後政治的行動を共にすることになった。忘れ難い尊敬すべき先輩だった—西田さんと最後に会ったのは、八〇年代末、プロ文革と中国革命の再検討、コミンテルン以来の国際共産主義運動の再検討の必要を考え始めていた私が、西田さんに共同の作業を訴えた時であった。氏は大いに共鳴され、日比谷公園の松本楼で一緒にビールを飲み、今後のことを語り合った。

残念なことに氏はその後間もなく他界された。情熱家で誠実な人だった。

西田さんは、私の細胞の状況を聞き、四谷の東京準備会の事務所に聴涛学氏を訪ねてはと紹介された。

聴涛さんは三〇代半ばで家族四人で中国留学から帰国されていた。準備会には、日共中央委員であった安斉康治さんや寺尾五郎さん、三好一さんらが参加されていたが、中心で専従的活動をされているのは聴涛さんのようであった。彼は「アカハタ」で日共から攻撃されていたので私も名前だけは知っていた。彼はわれわれの細胞の準備会への参加を要望したが、その前に一度会合に出てみてはと言った。

東京準備会の会合に初めて参加した時の印象は今でも憶えている。と言うのも、私にとってはとても期待外れの印象が強かったからである。参加者は五〇名位だったろうか。私は日共除名派は相当数いるだろうと予想していただけに、まず数の少ないのに驚いた。会合は、どのような政治路線でどのような党をどのように建設するかが中心に論議されるものと思っていたが、論議の中心はほとんど日中友好運動の問題—これは後で判ったことだが、当時日中（正統）内では中国派内の対立がかなり激化していた—に終始した。これも期待外れであった。これで日共と対抗できる革命的党組織になりうるのか。あまりに予想と違っていたことから、これから参加する組織としてはかなりの不安を憶えた。

会合の後、私は自分の率直な感想と意見を聴涛氏にのべ、日共除名派の情況、また東京準備会

の情況についても質問した。細胞の隊伍をもって参加したところは少数であった。日中友好運動関連の人達が多く、労働者は少数であった。しかし、労働者の場合は多く細胞を形成していた。

私は、このような情況では早期の党組織の結成は無理ではないか、日共除名者はもっと多いはずであり最大限の結集をはかるべきはないかなど注文を出した。

聴涛氏は、日共反対派といっても、除名者もいれば離党者もいる、党建設についても解党主義的傾向の人々も結構いる、日共時代からの組織的隊伍を維持している細胞は少ない、政治路線上も、農村から都市へと中国革命方式を主張するような人々もいるなど様々である、日本革命の問題よりは中国問題で日共と分岐した人々が日中友好運動関連では多い、最大限の結集を考えて自分も日夜動いているが簡単ではない、しかし、この現実から出発するしかない、等と応えた。

私は当時の情況にはうとかったから聴涛氏の言い分には道理があった。ないものねだりをしても仕方がなかった。

私は細胞に持ち帰って、自分の感想と情況を報告した。細胞は東京準備会への参加を決定した。当時、われわれにはそれ以外の選択肢はなかった。

細胞の参加を決めた後、しばらくして聴涛氏は私に難題を持ちかけてきた。準備会の専従として一緒に活動してくれないかという件であった。私には考えたこともない問題だった。私は翌四月から就職する予定だった。それには準備も必要で別の県へ行くかも知れなかった。恩師の山本二三丸先生からの話でまだ返事はしていなかった。

聴涛氏は相当の決意をもって帰国しているように思えた。彼の苦闘ぶりをみれば、自分の能力は別にして彼の申し出を断ることはできなかった。私の党専従転身はこのような特殊な情況下の特殊な例だが、その後一五年間なんとか活動できたのは、山本、宮川澄の両先生や同志・友人たちの教示と支援のお陰だったと思う。三好一さんや西田さん、労働者の大杉さんはじめ東京都委員会の同志たちは未熟な私を大きな目で育ててくれた。

私は六九年四月から専従として活動する予定であった。しかし、年明けの真冬、聴涛氏が突然他界してしまった。

過労だった。彼はあまりにも生真面目過ぎた。死を急ぎ過ぎるかのように時を惜しんでいた。気骨のある人だった。短い付き合いだったが鮮烈な印象を残した人物である。

私は、活動の経験もなければ左翼世界の情況にもうとく、聴涛氏の手助けが出来れば良いと考えていたから、彼の急逝は本当に衝撃だった。彼の負っていた責任を背負わなければならなくなった。私には災難に思われたが、もう前へ進む外になかった。

聴涛氏が亡くなって間もなくの三月十五日、日中友好協会（正統）本部で突然内ゲバ・テロルが起こった。聴涛氏は亡くなる直前、日中（正統）内では近く不穏な事件が起こる危険があるとつぶやいたことがあった。互いに忙しかったから、私はその理由は聞いてなかった。事件が起こって、しまったと思った。

(2)　内ゲバとテロル

日中（正統）本部で開催されていた全国理事会が暴徒に襲われ、一晩中監禁・暴行を受けた。暴行に加わった者には会員もいたらしいが、会員外の者もいたという。事件を聞いて朝駆けつけた時は後の祭りであった。当時、日中友好運動の方針・政策をめぐって内部に対立があったことは事実だが、一部の者は人民内部の矛盾を暴力的に「解決」しようとした訳である。

当時、中国はプロ文革の最中にあり、「造反有理」の名のもとに幹部のつるし上げや暴行、武闘が行われていた。毛沢東バッヂと毛語録、カルト集団にも似た個人崇拝の風潮、無原則な暴力と武闘。私はプロ文革に期待感を持っていたが、これらの非プロレタリア的現象―それらは毛沢東の本意とは異なるものと解していた―には嫌悪感を抱いていた。

プロ文革がわが国にも大きな影響を及ぼしていたのは事実だった。一部の人々は熱狂的にこれを支持していた。とりわけ日中友好運動にはその影響が強かった。中国・プロ文革の物真似をしたのか、わが国でも類似の暴力沙汰が起こったのだった。

当時、日中（正統）は一方で日共と分岐しながら、日中国交正常化要求の全国的運動を展開していた。日本帝国主義の中国侵略という歴史から、この運動には広範な勢力が参加していた。しかし、この運動は思想・信条を問わず、日中友好と国交正常化要求という一点で広く団結を呼びかけるもので、一部ブルジョアも参加する組織の運動であった。このようなゆるやかな運動組織

に他の革命的課題や要求を持ち込み、革命的運動を要求するのは場違いのことだった。極「左」風潮にとりつかれた人々は、この運動組織の特殊性を認識せず、革命的課題と闘争を要求していた。そして、内ゲバとテロルをもってこの要求を強要したのだった。

（正統）本部は機能マヒ状態に陥った。暴力沙汰を怖れて人々は本部に寄りつかなくなった。幹部はテロルの危険から家にも帰れなくなった。三好一、島田政雄、赤津益造さんらは戦後米占領下で日中友好運動を起ち上げた人々で、日共から分岐して東京準備会に参加されていた。

内ゲバとテロルは明らかに内部からの運動破壊であった。このままでは運動が潰される危険があった。私は同志たちと相談して大学の支部名で、内ゲバ・テロルを糾弾する声明を出し、止むなく（正統）本部の防衛を行うことを決めた。多勢に無勢では敗北は覚悟の上だったが、内ゲバとテロルに対して断固たる姿勢を示す必要があった。

防衛を解いた後の四月七日、またも本部が襲われた。私も拉致され入院する破目になった。他の同志は職場から拉致され、大学構内で暴行された。その後、襲撃は（正統）本部から東京準備会にも向けられ、事務所と演説会が襲撃された。

この時期、恩師から手紙が届いた。かってないことだった。日中友好運動内の「造反派」を支持する立場から私に忠告する内容だった。先生は新島淳良ら当時の親中派知識人と交流があったから、かれらの影響と圧力によるものだと思った。私は、内ゲバとテロルには断固反対すること、自分の政治的行動には責任をとること、情況も知らずに政治的問題に深入りすることは危険なこ

とを返事した。先生は私の拉致の件は知らなかったからショックだったらしい。当時の一部知識人の極「左」的な舞い上がりぶりは相当なものだった。知識人には長所もあるが、このような欠点もある。

襲撃は数ヶ月続き、執拗で計画的だった。寺尾五郎さん宅は何者かに一晩中監視付きだった。指令部が、どこかにあることは明らかだったが、どのような政治勢力なのか探ったが解らなかった。当時、私達も若く拉致行為には憤激していたから、指令部が判明すれば、この卑劣漢どもと直接談判するつもりだった。しかし、今になって思えば、それは判らずに良かった。もしもそのような事態になれば、われわれもまた内ゲバの泥沼に引き込まれていった危険性があったからである。

いまでも「連合赤軍事件」が報道される度に、当時の極「左」潮流と拉致・襲撃事件を思い出す。この事件には、当時の中国派極「左」潮流が思想的影響はもちろん直接間接係わったと思う。日共神奈川県委員会（左派）のMさんは拉致されたと聞いたが、その後の神奈川（左派）は京浜安保共闘から連合赤軍へと連鎖していった。私は連合赤軍の青年たちの誤りを思うにつけ、表にはでてこない裏の影響者たちにむしろ強い憤りを持つ。

連合赤軍事件、中核、革マルなどに代表される内ゲバ、それに北朝鮮の拉致事件にもかんだ赤軍派の卑劣行為。これらはわが国の左翼運動の恥部であり、プロレタリア運動に甚大な打撃を与えた。これら非プロレタリア的思想と行動を批判し克服しないかぎり、わが国の共産主義運動の

再生も、労働者民衆の支持獲得もできないだろう。

最近、社会批評社から『検証・内ゲバ』を出版され、内ゲバの思想的・政治的・歴史的解明と批判を提起された。勇気ある行動と思う。

日中友好運動及び中国派の内ゲバ・テロル体験を通じて私は、ある種の認識を強めた。事大主義と対外盲従的な思想傾向の害毒とそれへの批判である。自戒を含めて私はこのような思想傾向への警戒心を持つようになった。

(3) 中ソ論争と中国・プロレタリア文化大革命 ―当時の私の認識と態度―

国際共産主義運動をめぐる中・ソ両国共産党の論戦と中国・プロレタリア文化大革命は、当時の私にとって大きな関心事だった。

中国共産党は、当時のソ連共産党の国際路線を「平和共存・平和競争・平和移行」に代表される修正主義路線とみなし、またその国内路線を「資本主義復活」路線とみなし、中ソ論争を国際共産主義運動の命運にかかわる現代修正主義との斗争として展開していた。

ソ連共産党とはちがって中国共産党は、自らの見解を内外に公開した。発表の度に私はそれらをむさぼるように読み、同志たちと研究会を持って論議した。

当時の私の認識と態度はどのようなものであったか。

中ソ論争について言えば、九九%と言ってよいほどの中国共産党支持の態度であった。

残りの一%とは、九評の中心的論文として有名な「フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓」―ソ連の国内路線を資本主義復活路線として批判―の中の過渡期とプロレタリアート独裁の問題に関する点であった。この点に関して中国共産党は、高次共産主義に至る歴史的時期全体を過渡期とみなす「大過渡期」論的見地から、この時期全体にプロ独裁の国家が存在するという見解を表明していた。

このような見解は、マルクスの言う「政治上の過渡期」(『ゴータ綱領批判』)とプロレタリアート独裁についての見地、その国家死滅論の見地とは異なるものであり、マルクスの拡大解釈である、と私はみなしていた―このような見解は今も変らない―。

しかし、右の一点を除いては、ほとんどの問題で中国共産党の見解がマルクス主義的な革命的立場であるとみなし、これを支持していた。当時の私の認識と立場はこのようなものであったが、共産主義者は自らの持場での活動と同時に、国際的な共産主義運動の重要問題にも関心を向けなければいけないという意識を強く持つようになった点で、中ソ論争は私自身にとって有意義であった。

中国・プロ文革は、先の「大過渡期」論を理論的基礎として社会主義の変質防止の観点から毛沢東によって提起されたものである。毛沢東の新たな理論的貢献と言われた「大過渡期」論に基

づく「過渡期階級斗争」論への疑問は別として、それが当初官僚主義防止やコンミューン原則の実施によるプロレタリア民主主義の実現等の要求や令題を掲げたことから、私はコンミューン的原則の実現に非常な期待感を持った。個人崇拝現象や行き過ぎた幹部批判・武闘等の極「左」現象には批判的であったが、それらは支流とみなし、文革を支持した。

中ソ論争とプロ文革についての私の当時の認識と態度は右のようなものだったが、その後の経験を経て今日の私の認識と評価は変化した。

中ソ論争について言えば、「平和共存、平和競争・平和移行」等についての批判は基本的に正しかったと思われる。しかし、最大の弱点と誤りは、ソ連の社会主義問題についての批判が、スターリン主義的路線と観点から行われていたことである。したがってそれはマルクス主義的な立場からの批判とは成りえなかった。

「スターリン問題について」の論評は、中国共産党がスターリン版『ソ連共産党(ボリシェビキ)歴史小教程』にみられる「正統史観」を依然として踏襲していることを表明していた。「正統史観」はボリシェビキ党の党内斗争とロシア革命の歴史の真実を隠し、転倒させたものだった。

プロ文革の実際とその帰結は、私の期待とは裏腹のものだった。

中ソ論争とプロ文革についての私自身の認識には変化の過程があった。これらの問題についての詳論は別稿にゆずりたい。

(4)　中国派の統一と建党問題、全国協議会

六六年から六八年の時期に、日共反対派、中国派の統一と建党問題がどのように協議されたかは知らない。聞くところによると、山口(左派)と各グループ、個人との個別の接触はあったらしいが、建党問題を公に提起して協議と結集を呼びかけることは無かったらしい。これは当時の日共反対派の最大の問題点であったと思う。

その責任は、当時最大の勢力であった山口(左派)が負うべきだが、他のグループ、とりわけ日共の幹部だった人々にも責任の一端があると思う。日共の日和見を糾弾し、共産主義者を自称しても、ではどうするのかという建党問題を棚上げしては半分空文句に過ぎないではないか。このような考えはいらい一貫して私の中にある。

しかし、六九年当時には、中国派の統一への気運はほとんど消失していた。むしろ内ゲバにみられる対立こそが激しくなっていた。

当時中国共産党は「階級闘争の烈火の中でプロレタリア政党は生まれる」という論調を張っていた。私はこの論調には疑念を抱いていた。それは一般的に間違いではないが、しかし、マルクス主義者の意識的努力なしにプロレタリア政党が自然成長的に形成されることは決してありえないからである。目的意識性の必要な時にこの論調は何を云おうとしているのか。

この時期私は、団結・統一の願望もあって旧日共幹部のぬやまひろし氏の事務所を訪ねた。五

一年綱領的日本資本主義分析と農村から都市への熱弁には返す言葉も失ったが、建党問題への言及も意識もみられないのにはもっと驚いた。かなり失望したが、交流を願って辞したことを憶えている。

時は移って、その後、中国共産党と日共との関係修復が行われた。私に熱弁をふるわれたある人は、除名者以外の日共離党者の日共復帰を説いてまわられたという。事大主義者の悲劇だが、わが国共産主義運動の悲劇的一面である。

山口（左派）を中心に全国協議会が結成され、日共（左派）の結成に向かうことになる。最大の問題点は、建党の大義を掲げたマルクス主義者の最大限の結集の努力が充分になされなかったことである。そこには後述する福田正義らの思惑とセクト主義が作用していたと思う。

全国協議会と云っても、山口（左派）の次は東京くらいのもので、各県の勢力は小さかった。このような情況下では、全国協議会は山口（左派）の主導下で党結成に向かう他なかった。

山口（左派）では内部の対立が激化し、新しい情況があらわれていた。劇団はぐるま座は訪中公演を行ったが、劇団の創立者であった劇作家・諸井條次さんは極「左」と福田正義らの指導路線に絶望して去られた。

原田長司さんは、「馬にニンジン」方式と文革と極「左」を批判して福田らに追われた。こうして日共時代からのふるい革命者が追放され、山口（左派）内での福田正義らの指導権が確立された。原田長司さんらがどのような理由と経緯で追放されたかをわれわれが知ったのは、その後で

あった。原長らの指導権が確立していれば、全国協議会も日共（左派）もまた別の途をたどったかもしれない、と今でも思うことがある。

全国協議会から日共（左派）結成までの期間は拙速で、政治路線の検討も浅く不十分なものだった。

三、日共(左派)の結成と分裂（一九六九年―七五年）

(1)　日共(左派)結成の意義

一九六九年十一月、日共（左派）が結成された。

日共（左派）結成の積極的意義は、議会主義・社会改良主義の宮本修正主義路線に断固反対し、強力革命の原則的立場を堅持して日本におけるプロレタリア革命をめざし、マルクス主義とプロレタリア国際主義にもとづくプロレタリア政党の建設をめざした点にあったと思う。

それは中国派を含むマルクス主義者のより広範な団結と結集に十分に成功しなかった点で、また宮本綱領路線の批判の不徹底さからくる政治路線上の弱点を残していたという点でも不充分さは避けられなかったが、しかし、その積極的意義は評価されなければならない。日共から除名された同志たちは、修正主義に堕した日共にかわる新たなプロレタリア政党の建設と日本革命をめざして党結成に参加したのであった。

このような積極面を持ちながらもこの党は、その内部に積極面に対立するもう一つの側面を含

んでいた。それは右翼日和見主義・修正主義に反対するという中に隠されていた極「左」日和見主義の思想傾向である。この傾向は（左派）結成後の実践の中で次第に支配的となり、革命運動と党の発展を阻害する重要な要因となった。

(2)　極「左」路線と労働者運動及び統一戦線

プロレタリア政党は、労働者運動を中心とする大衆運動の中に根をはり、労働者民衆への思想的・政治的影響力を拡大するとともに、大衆組織の連帯と闘争を促し、セクト主義を排して革命的統一戦線を発展させなければならない。

このように革命の力を蓄えることなしには、政治権力の奪収によるプロレタリア革命を成就することはできない。これは長期の困難な課題だが、プロレタリア政党が銘記すべき原則的なことだと思う。

日共（左派）に当初から濃厚で支配的であったのは極「左」的思想傾向であった。極「左」思想は、右に述べた原則的観点を持ち合わせないし、真剣に考慮することもない。

極「左」思想の背景には、日共の右翼日和見主義への反撥、中国プロ文革と極「左」思想の影響、当時の内外情勢と大衆運動の高揚などがあったと思う。革命運動は一直線には進まない。運

動の紆余曲折は避けられないが、右の後には「左」、「左」の後に右を注意する必要があると思う。

極「左」思想・路線のいくつかの特徴をあげる。

労働者運動と統一戦線。

山口（左派）ではすでに全国協議会の時期から、「闘争委員会」方式の運動を「新生事物」として自讃・推進していた。労働組合とは別に少数の労働者が「闘争委員会」を形成し、労働者運動をけん引しようというわけである。

結果はどうであったか。

労働組合とは対立し、組合からは追放され、労働者の中で孤立化を深めた。資本の前に党組織は露呈し、格好の標的とされた。戦前の全協以来の労働者運動における誤りの教訓など何ら顧慮されることなく、はね上がり戦術が採られたわけである。

生産点に革命の力を蓄えるどころか、反対にそれまでの政治的影響力も失い党組織も孤立破壊された。

山口（左派）は当初県内の労働者運動の中に一定の影響力を持ち、社会党などとの連携も保持していたが、それらは数年の間に急速に減退・破壊された。

労働者運動では私も痛恨の経験がある。一九六九年の佐藤訪米阻止闘争でH細胞に実際の力量以上の闘争を要求したことである。この結果、細胞は分裂し、多くの同志が党への不信を抱いて隊列から離れた。後に私はこれらの同志たちに自己批判したが、しかし、同志たちに与えた精神

的打撃と失った損害はあまりにも大きかった。細胞は日共から造反し、着実に労働者の中に影響力を拡大していた。大経営で二ケタの党組織を建設するのは並大抵ではない。この細胞からは四人の党専従を引き抜いたが、これも正しくなかった。私も極「左」風にふかれていたのである。

この経験以来私は、具体的闘争方針や政策は力関係と情況を熟知した細胞の同志たちが決めることで、機関要員があれこれ指図することはできもしないし、すべきでないと肝に銘じた。

青年運動、婦人運動、教育運動、文化・芸術運動その他、各方面の運動にも極「左」路線はそれぞれの特徴をもってあらわれた。「民族民主教育」や江青の文芸路線と類似の極「左」政治主義文芸路線などはその端的例だが、ここでは省略する。結果は労働者運動と同様の情況をもたらした。

あらゆる力を結集して敵に当たり人馬を集めて敵を打倒する。これが革命的統一戦線の思想観点である。この観点に立てば、セクト主義の害悪が解る。日共やその他の新左翼政派もとかく大衆組織を私物化したり、セクト的観点から共同行動や統一戦線の発展を阻害する。左翼のセクト主義と引き回しに大衆は嫌気がさしている。

プロレタリア的立場に立たないからセクト主義になる。極「左」路線も同様である。人々を大きく団結させるのではなく、自分に同調しないものは排除する。その結果、世間が狭くなり、裸の王様になり、たこつぼに入って大言壮語するだけとなる。これでは革命など空文句である。日共（左派）もたこつぼ派に陥ってしまった。新左翼にも統一戦線の観点は希薄にみえるが、この病いの克服なしにはわが国の革命運動の発展は困難だ。

(3) 党建設の問題

党の組織建設の基礎は基層組織としての細胞建設である。労働者細胞を基本とした党組織を基盤として形成される党でなければ、プロレタリア政党として機能しえない。またこのような党組織でなければ、支配権力と頑強に闘っていくことはできない。これは大切なことだ。

これを基本としながら、あらゆる階層、あらゆる戦線で党は活動しなければならないから、この方面で活動する党員と党組織も必要であり重要である。「労働者主義」に陥ってはならない。

党細胞を基礎とした党の組織建設と労働者民主主義に基づく党の運営と活動—このような二本柱に立脚する必要があるのではないか。これは、私が経験的にくみとってきた党建設についての一つの体得である。

日共（左派）内には、党建設についても異なった二つの路線の対立があった。その対立は実践活動の中で次第に鮮明になり、先鋭化することになった。

極「左」路線は、党の組織建設でも経営細胞を中心とした党の組織建設を一貫して追求するということはしなかった。骨の折れる仕事はしないのである。もちろん口先で否定はしないが、実際にそのような観点で地道に活動するかどうかが問題である。真剣に基層組織の建設を追求しない者は、簡単に党組織を破壊もする。ことの重要性を認識していないからである。

日共（左派）内では党の組織建設でも不均等性があらわれた。山口（左派）の組織は発展する

どころか、あちこちで破壊され減少傾向をたどった。極「左」路線下で各県の党組織は伸び悩んだ。東京では当初いくらかの発展をみたが、困難につき当たった。とりわけ極「左」による青年組織の破壊は大きかった。ある時期から、私は党組織の孤立化と破壊からの防衛を意識するようになった。

労働者民主主義に基づく党組織の運営と活動は、プロレタリア政党にとってもっとも大切なことだ。党内労働者民主主義がなければ、それが第一義的に尊重されなければ、党組織はあらゆる英知を集めることができないし、党員の革命的能動性を発揚できない。党内矛盾や意見の対立を民主的に解決していくことも、誤りを正してより正しい路線・政策を採っていくこともできない。要するに党内矛盾を党発展の原動力にしていくことができないのである。

中央委員会議長となった福田正義は、党内民主主義を尊重せず、自己のとりまきを中心に恣意的な党運営をおこなった。党の政策・方針の決定は十分に民主的討議を得て決定されるわけでもなく、決議案も提出されず、福田、穴迫らが勝手に起草した。したがって、党の活動が真面目に点検・総括されることもなかった。このような恣意的・私党集団的党運営がまかり通った背景には、全国的な党組織がまだき弱で、細胞を基礎とした党組織としての態をなしていなかったこともある。

福田氏らの党建設路線のいくつかの特徴をあげる。

①「整風運動」による党への打撃

整風運動とは中国共産党からの輸入品である。整風とは党の作風を整えるということで悪いことにはみえないが、中国革命でも良い役割は果たさなかった。実際は、党内粛清であり、党内の一方の派が他方を打倒し追放する手段として使われた。元祖はスターリン派の粛清である。

具体的な政治的問題をめぐって、もし政治上の誤りがあった場合にその原因を総括し教訓とすることは必要だが、政治上の問題と無関係に思想問題を云々することは意味がない。百％ボリシェビキなどいるはずもなければ、「プロレタリア思想をうちたてる」などと坊主懺悔してもプロレタリア的になるわけでもない。批判と自己批判と言っても、一見聞こえは良いが、一方が他方を打撃するのが実質である。

整風運動は、党内の疑心暗鬼と相互不信をもたらし、革命的団結とは逆の効果をもたらした。党員は革命的積極性を失い、精神的に萎縮する。聖人君子になるには何も活動しないのが一番よいということになる。

極「左」路線による整風運動の主な目的は、極「左」に同調しない党幹部と党員を整風にかこつけて打撃し、ひきづり落とすことであった。こうして党幹部は次々に交替させられることになる。前の幹部を批判して幹部になった者も次には同じ憂き目に合う。党内労働者民主主義を無視した任命制と目まぐるしい指導部の交代劇は極「左」路線の特徴である。

整風運動と言っても、それを発案した指導部が自らその模範を示す訳ではない。彼らには整風

の必要はなく、すべて問題は下級にあるわけである。運動が成果が上がらず行き詰まると、その責任は下級に転嫁される。これはスターリンが行ったことであり、毛沢東にも同様のことがあった。極「左」潮流はその真似事をしたのである。

私は、連合赤軍の粛清事件をみて、整風運動の極限と本質をみる思いであった。

②　頭でっかちの党建設

極「左」が基層組織の建設を重視しないことは先に述べた。

基層組織の細胞は弱体なのに、やたらと専従を増やし、頭でっかちの党をつくるのが極「左」の特徴である。頭でっかちの専従体制を維持する為には、党員から過重な党費を徴収しなければならない。これではいつまでも持たない。

職業革命家中心の党組織建設というレーニンの初期の党組織路線はツアー専制下の特殊な状況下で提起されたが―しかし、この路線は批判的に検討する必要があると今の私は思っている―、極「左」によってよく援用される。

頭でっかちの党組織は、長期の革命運動には耐えられない。

③　革命者はいかにして育成されるか

党の専従者や幹部は、慎重に長期的展望をもって育成されるべきである。専従者は、基層組織

での活動の経験と基層組織の点検と信任を経て選抜されるべきである。このようにすれば、変なヘリコプター幹部や職業革命家が生まれる弊害もかなり防ぐこともできる。日本共産党の戦前戦後の経験から驚くべきことは、党の中枢まで権力のスパイの潜入が可能であったことである。最近は、中核派なども類似の件で大騒ぎしているようである。その主な原因は、基層組織での一定期間の点検と信任の不備にあると思う。

現地の党組織との相談もなく頭ごしに幹部の任命を行うことは、スターリン主義組織路線の特徴だが、これは厳に戒めるべきだ。

④　マルクス主義の思想方法と理論を身につける

党員が有能な革命者として成長していくためには、実践活動と同時に、マルクス主義の方法と理論を身につけるようにすべきである。特に若い時に勉強すべきであり、党組織はこの点を考慮すべきである。そうしないとにわか革命者ができあがり、長期の曲折する複雑な革命運動に信念をもって対応していくことはできない。

私は専従の若い同志には、午前中に一時間でもマルクス主義の勉強をするようにすすめた。それも解説本ではなく原典を苦労して勉強するようすすめた。自分で労してつかんだものしか身につかない。

労働者を中心に、資本論三巻の学習を計画的に行った。恩師にも手伝ってもらった。労働後の

数時間はきつかったと思うが、みなそれなりの思想的・理論的確信を得たと思う。毛語録で即席に革命者は育成できない。

福田氏らは、党員のこのような学習や育成には内心反対であった。かれらは党員や幹部の長期的な育成の観点など持ち合わせていなかった。自らがマルクス主義の学習をしないばかりか、他者がそれをすることにも反対であった。

マルクス主義の方法と理論で革命運動の実際問題を自分で考え自立した共産主義者となる―このような党員と党組織を建設していくことが必要だと思う。

極「左」思潮は右翼日和見主義より見分け難い。それは一見戦闘的で革命的な装いをとるからである。しかし、それは右と同様に革命運動を阻害し、党建設を破壊する。

「民主主義的中央集権主義」、いわゆる民主集中制の組織路線は、実は中央集権主義の組織路線である。レーニンの組織路線の批判的検討とスターリン主義組織路線の批判・克服はこの際必要なことだと思う。

(4)　極「左」路線との対立と党の分裂

数年間の実践は極「左」路線の破綻を次第に露呈した。人の認識は実践を通じて発展する。階

級闘争の高揚期にはまだ判然としなかったものが、退潮期にはより明確になってくる。全国的に党の政治的影響力は拡大せず、党組織は停滞あるいは減少さえしつつあった。福田議長らはその現実を直視するどころか、責任を他に転嫁していた。

私は他の同志とともに中央委員会の東京移転を早くから主張していた。福田氏らが本気でその問題を考えていないことは次第に明らかになった。宮本の日共と真っ向う対決する気など初めからなかったのである。

このような立場からすれば、東京の組織が発展することは好ましくなかった。寺尾五郎氏は早い時期に排除された。青年組織への指導は共青同盟中央の指導に移されて福田氏らの影響下に置かれた。一時期発展していた青年組織は停滞し、人材は次々に山口の方へと引き抜かれた。自らの対抗物は消すというのが福田氏らの常套手段であることを認識せざるをえなかった。

私はいづれ福田氏らとの対決は避けられないと自覚するようになった。日共時代のように何らの準備もない党内闘争の甘さは許されないと思った。当時私は、東京都委員会の責任を負う立場にあったから、党組織の分裂と破壊は絶対にくい止めなければならなかった。そのためには、時間と準備が必要であった。準備が整うまでは早まった党内闘争は避ける必要があった。福田氏らの手法からすれば、党内矛盾の民主的解決はありえず、最悪の事態を考慮して対処しなければならないことは経験的に明らかであった。

幸いなことに、東京在住の三人の政治局員の党内問題についての認識の統一がかちとられるよ

うになった。隅岡さんは山口から、渡辺さんは大阪から東京へ移ってこられた。いづれも私より先輩で革命に対しては純粋で真面目な人達である。隅さんは山口時代は福田らの側近と思われた人だったが、その後、極「左」路線の誤りと福田氏らの権謀術数への認識を深められていた。われわれは思想、政治、組織の各方面から、極「左」路線の誤りの総括を深めていった。それは、福田氏らだけに転嫁できないわれわれの共通の誤りであり、共通の責任問題でもあったからである。

一九七四年の初め、鄧小平が三つの世界の区分という当時の国際的な国家間の政治勢力の配置についての毛沢東の観点を表明した。大まかに、国際的には米ソ二超大国の覇権主義に反対しなければならないというもので、それ自体は大した問題ではなかったが、福田や穴迫はいつもの流儀で中央委員会の論議も承諾も抜きに、福田の評注付きのパンフレットを早々に発表した。事大主義者・政治的投機分子にふさわしく早々に中国共産党支持を表明したわけであった。

しかし、そこには問題があった。一つは重要問題についての中央委員会無視の独断的手法だが、もう一つは、福田氏が党大会で自分の新発見のごとく提起していた国際統一戦線の問題―当時、なぜその問題をことさら言及するのか、その必然性がわれわれには解らなかったが―との整合性の問題であった。

われわれはこの二つの問題を質した。事大主義と党内民主主義の無視は改めるべきというのがわれわれの主張であった。ここから中央委員会と政治局での対立と論争は、中心の問題である極「左」路線の問題へと波及していった。論争は半年以上に及んだ。われわれは真面目に実践を総

括すべきことと、党内矛盾を人民内部の矛盾として党内民主主義の準則に基づいて粘り強く解決していくべきこと、そのためにも中央委員会の意見の対立を全党組織に明らかにし、全党的な討議にかけて全党の認識を高めるべきことを主張した。

われわれは、党の分裂的事態は避けたかったし、この際、全党組織が路線対立の内容についての認識を深めることがもっとも大切であると考えていた。それなしには極「左」路線の克服と党の新たな前進もありえないと考えたからである。

路線対立とその内容の公開は福田氏らがもっとも怖れたことだった。中央委員会でも政治局でも福田氏はほとんど自分の意見は言わず提灯持ちに発言させた。権謀術数を用いず公明正大であるかどうかは革命者にとって大切なことである。先般、コム・未来内の論争でK氏が私の論稿を偽造して私を批判するという手法を用い、私はこのような卑劣行為を厳しく批判したが、このような手法は、福田氏らに共通するものだった。かれは福田氏らによるわれわれへの不当な除名通知を持参した人物だったが、革命運動の中にかかる人物が現れるのも避けがたい。

こうして福田氏らはわれわれを一方的に除名することで決着をはかった。かれらは関東ビューローの事務所への襲撃まで行った。まったく新左翼の内ゲバ集団と変わらない実態を暴露した。

われわれは路線対立の内容を党内にあきらかにし討議にかけた。福田氏らはわれわれの文書を党員から取り上げたそうである。この時期、福田氏の戦前の転向問題が明らかになった。私は以前、A氏の戦前転向の自己批判を聞いたことがある。A氏の誠実さと福田氏の醜悪さとは対照的

だと思った。しかし、かかる人物が党の最高ポストにのし上がったこと自体、党全体の水準の低さを物語っていた。

こうして日共（左派）は五年にして大きく二つに分裂することになった。止むをえなかった。福田氏らのもとから新谷や日笠山氏などは関東ビューロー支持を明らかにした。福田氏らの日共（左派）からはその後離脱者が続出し、今では私党集団にすぎなくなった。

四、日共(左派)関東ビューローと統一の推進

関東ビューローは極「左」路線の総括を全党的に深めると同時に、「中国派」の政治組織との連帯と統一を推進することを決めた。

われわれは、各政治組織に日共（左派）内の路線対立の内容を報告すると同時に、「中国派」の不統一の主な責任が日共（左派）にあったことを自己批判し、連帯と統一を要望した。統一の最低条件としては誰もが容認できるであろう三条件を提起し、その他の意見の相違は小異として解決していくべきとした。このような態度は道理あるものとして、党内外の支持を得たと思う。われわれは統一可能なところから話し合いをはじめることにした。

原田長司、田中康造、安斉康治氏らの日本共産党（マルクス・レーニン主義）へ出向いた。原田、田中氏らははやい時期に福田氏らによって山口（左派）から追われた人々であった。われわれは自らの自己批判を行い、改めて連帯と統一のお願いをした。その時の原長さんの態度は今でも印象深く記憶に残っている。彼は涙を浮かべて再会を喜び、われわれの自己批判を受け入れ、

前向きの相談をしようということになった。竹を割ったような性格で革命の利益を第一にし、小異にこだわらず大局をみる人だった。私はマルクス主義者の連帯と統一の問題に直面する度に原長や康造さんのことを思い浮かべる。あのような人達が多ければ統一も難しくはないのだがと思う。

しかし物事は思うようには進まない。日共（マ・レ主義）との統一にも数年を要した。統一をめぐって相手方が二つに分裂する次第となった。統一の問題となると、どの党派内でもセクト的観点から抜け出せず統一に反対の者も出てくる。その際は双方の意見の相違を盾にとり、小異を拡大し、統一の条件をつり上げる場合が多い。またレーニン的党派闘争を真似て相互の論争をやろうという向きも出てくる。意見の相違点を明確にするのは必要だが、論争を無制限に拡大して対立を先鋭化し統一を棚上げにするのでは、何のために論争するのか意味がない。

安斉さんは統一を前に反対の側について去られた。東京準備会の時にも去られたので二度目だった。こういう時こそ年配の経験ある同志は大局的立場から決断を示し、若い同志たちに革命の大道を進むよう進言すべきではないかと思った。真面目な人で尊敬していたが、この点だけは同意できなかった。

統一は実現し、党名は日本共産党（マルクス・レーニン主義）となった。原長さんは間もなく倒れた。田中康造さんはその後上京して、日笠山さんと同居して活動された。もう三人とも彼岸へ行ってしまわれた。

次に、日本労働者党との統一が推進され実現した。この二つの統一の仕事に私は参加したが、それだけでも結構な年月を要した。分裂は簡単だが統一はいかに忍耐と努力を要するかを物語っている。

統一問題の経験から次のようなことを感じた。

マルクス主義者の統一、党派の統一を推進する際には、全党員の積極性に依拠することが第一である。基層の党員はほとんど無条件的に大同団結に賛成する。小セクトでは革命の大業は成らないと誰でも知っているからである。多く障害がでてくるのは党派の上級機関である。セクト的な思惑が働くからである。

小異を残して大同につくのだから、意見の相違点は公開し、労働者民主主義の準則にも基づいて異なった意見も尊重するという観点を全党のものにしていくことが大切である。

また小ブル的でセクト的な指導権を争う観点を捨てることである。関東ビューローはこの点は厳守してきた。もしわれわれにそのようなセクト的思想観点があれば、連帯と統一の推進を口にしても誰も信用しなかったであろう。

統一の推進に際して、職場から党専従に引き抜いた同志たちには改めて自活の道を探してもらうことになった。極「左」路線によってこれらの同志たちには多大の犠牲を強いた。麻生君は事故で亡くなったが、これらの同志たちには頭を下げる以外にない。

「中国派」の統一が一応完了した後、私は約一五年間の専従を降りた。財政事情からも党専従は

多すぎた。党の力量に応じて専従は増やしていくべきだというのが、私の経験からの考えである。

一部の同志たちから引き続き専門的活動ができるよう援助の申し出を受けたが、有り難く辞した。私は社会生活の経験も活動もない学生出身で、すぐに党専従になった者である。レーニンやトロツキーのような特別の才能に恵まれた人材は別にして、このような例を一般化してはならない。

五、二〇世紀社会主義の挫折と総括

専従を降りた時期から、ソ連「社会主義」の破綻、中国におけるプロ文革の破綻と鄧小平路線の登場など国際共産主義運動の挫折と末期的症状が、また国内での労働者運動の沈滞と日共の右翼化、新左翼運動の破綻が顕著になった。

私自身走り回ってきたが、一体どれだけのことをなしてきたのか自問しはじめていた。もっと根本的な大きな問題、自身のマルクス主義なるものについても、もっと大きな問題があるのではないか。すべての問題を検討し直してみる必要があると思いはじめた。

ソ連邦のペレストロイカにも鄧小平の新路線にもほとんど幻想は抱かなかった。一喜一憂しても、もはや何の役にも立たないと思うようになっていた。すべて原点に立ち返って考え直すという思いが強くなっていた。一九八九年の天安門事件と九一年のソ連邦崩壊はこのような考えを一層強めさせた。

私は、国際共産主義運動の総括的作業とこれを関連して自らの思想・理論と活動の点検の必要

を痛感した。もはやそれなしには前に進めないと思った。このような考えを身近な隅岡、日笠山などの同志たちに話し、共同の作業を要請した。

日本の共産主義運動の様々の誤り、中国プロ文革と中国革命の挫折、ソ連邦の崩壊、これらの根本原因はどこにあるのか。問題は大きく山積みしていたが、先ずロシア革命とコミンテルンの歴史的問題から再検討しなければ、二〇世紀共産主義運動の問題は解明できないと思うようになった。

私はロシア革命史とコミンテルン史の勉強からやり直すことにした。というより、私はそれまでスターリン版『ソ連邦共産党（ボリシェビキ）歴史小教程』にみられる「正統史観」を額面通り信用してきたおめでたい人間だったから、それまで歴史の真実を知らず、また知ろうともせず、自身いっぱしのマルクス主義者のつもりでいたのである。まことに恥ずかしいことだが事実である。

ちょうどこの頃、トロツキーの著作『ソヴェト・ロシアの新経済政策と世界革命の展望―コミンテルン第四回大会報告』（「社会主義と市場経済」大村書店）を書店で目にした。この論文は社会主義への過渡期の経済政策に関して述べたもので、一つは、コミンテルン第四回大会で報告され、病中のレーニンが出版を要望していた。もう一つは、レーニンが出席できなかった第十二回党大会―レーニンはスターリンに代表される「トロイカ」との闘争を決意していたが出席できなかった―での報告である（『工業報告』）。

かねがね中国の過渡期問題に関連して、毛沢東に代表される過渡期見解とその政策に疑問を抱

いていた私は、この著作を一読して本当に驚いた。そこには、私があれこれと模索し考えあぐねていたものと同種の問題が取り上げられ、かなり明解な内容をもってマルクス主義的観点が提示されていた。それは中国の過渡期問題を解明するうえでも共通する内容を含んでいた。

私はしばし呆然とした。それは、マルクス主義の方法と理論に精通し、それを現実問題に適用することのできる人物にしかなしえない内容のものだった。私はそれまでトロツキーの著作を読んでいなかった。痛恨の思いだった。しかし、悔やんでも仕方ないので、出直しを期してトロツキーの著作をはじめロシア革命史に関する資料を勉強しはじめた。私がいくらか真面目に勉強したのは、大学を出てからの数年間とこの時期だけである。

これらの作業を通じて私は、スターリン版『歴史小教程』が歴史の偽造書であり真実はその反対の側にあることを認識するに至った。レーニンの最後の闘争を継承し、スターリン派と闘争したのはトロツキーに代表される党内反対派であり、スターリン派による党の指導権簒奪によってロシア革命の変質・挫折がはじまったこと、またスターリン派によるコミンテルン支配がその後の国際共産主義運動に重大な影響と害悪を及ぼし、中国やヨーロッパ、日本の運動をも左右したことを認識するようになった。

私のトロツキー評価や従来の国際共産主義運動に関する見方は大きく変わらざるをえなかった。中ソ論争や中国革命についての分析・評価も同様である。私は自らの不勉強と誤りを古くからの同志たちに伝え、もう一度初心に帰ることの必要を訴えた。

私の小著『ソ連崩壊とマルクス主義―レーニン最後の闘争とその後―』（図書出版）は、このような作業の一つとして同志たちに回し読みしてもらった論稿で、私にとっては自省の書である。

もともと出版など考えていなかったものを、同志や支持者たちの支援で出版せよということになった。私の誤りから党を離れることになったH細胞の同志たちも拠金してくれた。つたない作業ではあったが、同志たちとの共有の思想的財産になったことは有り難かった。話を聞きつけた寺尾さんは、金一封を同封して出版せよと励ましの手紙をくれた。

寺尾さんについては、数々の思い出があるが、ここでは最晩年のことを記したい。小著を出した後、寺尾さんを訪ねた。いつになく真面目な態度でメモをされて、私に話された。

次に、中国革命の問題について、プロ文革の問題も含めて書くようにと注文を出された。私はまだ自分でも整理できない問題があると応えた。優等生にならなくてよい、中国革命を支持した生身の人間が書く必要があるんだと、寺尾さん流に言われた。私は約束して帰った。この約束は遅くなったが近く果たすつもりである。

その後、また寺尾さんに呼ばれた。自分はもう癌で先が永くない、やり残した仕事であるマルクス主義者の連帯と統一をめざす建党協の仕事に協力してくれとのことだった。三〇年前に東京準備会で一緒だった頃よりも寺尾さんは真剣に見えた。

革命運動に対しては無私の人だった。些事にこだわらず、大局を観る人だった。マルクス主義者の統一という大事をなすには、こういう人が必要である。後年の安藤昌益研究の背景には、マ

ルクス主義を自前のものとして日本の階級闘争に土着させなければならないという強い信念と事大主義批判があったと思う。寺尾さんの偉いところだった。また会って話したいと思う先輩たちがいるが、その中の得難い人物の一人である。

日本共産主義運動はこれら革命者たちの闘争の経験と革命的伝統を引き継がなければならないと思う。革命運動は最後の勝利まで失敗や誤りは避けられないが、勝利を勝ち取るには歴史的経験からも学ばねばならず、とりわけ失敗の経験から学ぶ必要がある。

こういう次第で私はコム・未来に参加した。私がこれまでいくらかでも運動に貢献したことといえば、狭い枠内だがマルクス主義者の統一推進に努めたことくらいである。コム・未来への参加は、その延長線と考えたからである。

一緒に参加した畏友の日笠山慶尚同志は、昨年他界した。彼には、日本とソ連や中国のプロレタリア芸術運動の歴史的問題についての総括的研究成果を書き残して欲しかった。志半ばで去ったのはなんとも残念でならない。

六、いま思うこと

二〇世紀には資本主義の政治的・経済的危機にともなって、国際革命の好機が幾度か訪れた。ロシア革命に続くヨーロッパ革命、とりわけドイツ革命は、幾度かの好機を逸した。その責はスターリン主義のコミンテルンとドイツ共産党にあるが、ドイツ革命が成就していれば、その後の国際情勢と国際共産主義運動の様相は大きく変わっていただろう。ドイツ革命の失敗についてはトロツキーが含蓄のあることを語っている。

第二次世界大戦は、またも国際革命の好機をもたらしたが、世界のスターリン主義党はその日和見主義路線のために、この好機を革命に転化できなかった。日本共産党は戦前に党が壊滅し、戦後の情勢にも対応できなかった。東方の曙光として現れた巨大な中国革命は、社会主義への過渡期に挫折した。

こうしてみると、二〇世紀資本主義の延命は、ブルジョアジーの勝利というよりも、革命主体の側の誤りと失敗によって支えられたとも言える。これらの歴史から、マルクス共産主義の思

想・理論に立脚しているかどうか、革命の路線・政策が正しいかどうかが、革命の成敗にとって決定的な意味をもつことを痛感する。革命を成すには、路線・政策の正しさと組織の力が必要だと言うのは一つの真理と思う。

革命的危機は度々訪れるわけではないが、二一世紀にはまた革命の時代が訪れると思う。すでにその兆候も現れつつある。しかし、残念ながら、わが国の革命主体の側の立遅れはかなりのものだ。二〇世紀社会主義の挫折という大きな変化があったのだから、マルクス主義の再生には少し時間がかかる。

革命運動に高揚と沈滞はつきものだ。このような時期には、経験を真面目に総括し、新たな前進を期すべきだ。いまは量より質の時期。マルクス的共産主義の立場に立ち、マルクス主義者の団結と統一を真摯に求めるならば、かつてボリシェヴィキ党がそうであったように革命情勢に対応して、小から大へと革命を導きうる党へと発展しうると思う。

私自身の小さな経験といま思うことを徒然に綴った。反面の教材、参考にしてもらえれば幸いである。

最初に断ったように、小稿は歴史的経験についての私自身の総括であり、諸々の経験や問題についての評価は私の主観的なものであっていささかもかっての組織の見解を代表しているものではない。したがって、小稿への意見や批判はあって当然であり、私はそれを歓迎したい。大切なことは、総括を共有の思想的財産とし、正反両面の教訓から学び、今後のプロレタリア革命運動

の前進に役立てることである。以上のこと了解戴きたい。

著者紹介

室　井　健　二（むろい　けんじ）

一九三七年　鹿児島県に生まれる。

一九六八年　日本共産党から除名。

一九六九年　日本共産党（左派）結成に参加。七五年に同党から除名。同党の分裂後は日本共産党（左派）関東ビューローに所属。以後マルクス主義者の団結推進をめざす。九八年、共産主義協議会（コム・未来）に参加。

著書『ソ連崩壊とマルクス主義』（一九九六年、『図書出版』）

未来ブックレット①

省みて前へ
—プログラム協議の発展のために—

発行日　二〇〇二年六月一五日発行

発行所　コム・未来出版部

編　集　未来ブックレット編集委員会

連絡先　〒一六四—〇〇〇三
東京都中野区東中野一—四一—五　文学会館二階
TEL　〇三—三三六五—七二〇六
FAX　〇三—三三六六—四六五〇
URL　http://www.commirai.org/
E-mail　info@commirai.org

郵便振替口座　00190—1—27941（コム・未来）

（落丁・乱丁はお取り替えします）

頒価　500円